



日本農業新聞 2026年1月30日

[特集] 水稻の再生二期作(随時更新)



一度刈った稲をもう一度伸ばして、収穫を二度行う「再生二期作」の機運が高まっている。各地の実践例や多収のポイント、課題などをまとめた。

[New 最大面積を日本農業新聞が試算 二期作“伸びしろ”は](#)

[2025年産の米価上昇を背景に、稲1株から2度収穫する「再生二期作」が広がってきた。米の長期的な安定供給につながる期待が大きい技術だが、全国的な収穫量や流通実態に関する統計がないため、不透明な部分も多い。米需給の乱れにつながると懸念する声もある。先進的に取り組む産地や関係者への聞き取りなどを基に記者が実態を探った。\(2026年1月30日\)](#)



New10アール収量「にじのきらめき」703キロ、「ひとめぼれ」579キロ 山口・下関の「清末東ファーム」

下関市の農業法人「清末東ファーム」は2025年産水稻の一部で、再生二期作に本格挑戦した。「にじのきらめき」3・2ヘクタール、「ひとめぼれ」6ヘクタールの合計9・2ヘクタールで栽培。2作合わせた10アール当たり収量は「にじのきらめき」703キロ、「ひとめぼれ」579キロとなり、...(2026年1月26日)



【解説】水稻の再生二期作 水稻で収穫後に伸びてくるひこばえ(二番穂)を实らせてもう一度収穫する栽培方法。温暖化で稲の生育可能な期間が長くなっていることから、温暖な西日本をはじめ東日本の

主産地でも実践の動きが出ている。沖縄県で行われる通常の二期作のような2回目の育苗・移植が必要ない。[▶詳しく読む](#)

本紙が独自調査 高収量の実例も

水稲の再生二期作について、日本農業新聞は各地の農家に2025年産収穫量の聞き取り調査をした。栽培方法は手探りながらも、肥料を十分にまいた圃場(ほじょう)で10アール当たり200キロ以上を確保する例もある。

[再生二期作、収量200キロ超も 本紙調査 施肥が鍵に](#)

(2026年01月01日付)

地球温暖化を逆手に取り、2026年も再生二期作が広がりそうだ。25年に試験して手応えを得た農家らは、作型や肥培管理を改良し、より安定した多収生産を狙う。

[「再生二期作」挑戦 作型、肥培管理改良→多収生産](#)

(2026年01月01日付)



先行農家、研究者はどうみる

関東以西で普及・拡大が進む再生二期作について、長年研究に取り組む農研機構中日本農業研究センター主席研究員の中野洋氏と、静岡県浜松市で実際に栽培を行うじゅんちゃんファーム代表の宮

本純氏に聞いた。

[▶\[対論2025\]広がる再生二期作 中野洋氏×宮本純氏](#)

(2025年11月2日付)

水稻の「再生二期作」が一段と広がってきた。農研機構の調べによると、2025年産の栽培面積は60ヘクタール程度で、前年産の約2倍に広がる見通し。米価が上昇する中、低コストで収量が確保できるとして関心が高まっている。

[▶再生二期作の面積倍増へ 25年産](#)

(2025年07月13日付・総合1面)

各地の実践状況は

稲の収穫後に切り株から出る二番穂を実らせて収穫する再生二期作で、滋賀県のJAグリーン近江は、自脱型コンバインを活用でき...

[再生二期作「みずかがみ」自脱型コンバインでもOK 滋賀](#)

(2026年1月15日) 水稻の収穫後に伸びるひこばえ(二番穂)を実らせて収穫する再生二期作に、農業高校生も取り組む。京都府立農芸高校(南丹市)は、生徒が課題研究として2年連続で2品種を作付けし、校内の官能検査では二期目の食味が「一期目と同程度かそれ以上」と評価...



[再生二期作農高生も挑戦 食味一period目と同程度以上 京都府立農芸高校](#)

(2026年1月13日) 京都府長岡京市の兼業農家、伊辻忠司さん(71)は2025年、初めて再生二期作に挑戦した。「ミルキークイーン」と「コシヒカリ」計約60アールで栽培し、収量は農薬を使わない...

[再生二期作に手応え 増収魅力 雑草対策など課題 京都の伊辻さん](#)

(2026年1月10日) 【えひめ】JA周桑が実証試験した2025年産水稻「にじのきらめき」の再生二期作で、一作目と二作目合わせた収量が10アール当たり約870キロだったことが分かった。8月に刈った一作目は同約600キロ、11月中旬に刈った二作目は同約270キロ。実証試験に協力した農研機構中日本農業研究センターは...

[再生二期作10アール870キロ にじのきらめきで実証 二作目270キロ多収に 愛媛・JA周桑](#)

(2025年12月05日) 米の供給安定の観点で、水稻の再生二期作に注目が集まる。ひこばえ(二番穂)を实らせて、もう一度、収穫する技術。収穫量の拡大が期待できる一方、課題、栽培のポイントなどは現場には、十分に伝わっていないようだ。東海地方で先行実践する農家に聞いた。

[再生二期作に手応え 「つきあかり」で初の実証 兵庫県神河町・中村営農](#)

(2025年12月05日) 【兵庫西】神河町の中村営農は今年、極早生水稻品種「つきあかり」の再生二期作の栽培実証を初めて行った。66アールで栽培し、10アール当たり120キロを収穫。米の需要が高まる中、限られた農地で増産できないかと考え、水稻17ヘクタールのうち5ヘクタールで栽培する同品種で実践した。

[\[東海特報\]水稻再生二期作 先行農家に聞く期待と課題](#)

(2025年11月24日) JA周桑は、2025年産水稻「にじのきらめき」で、稲を高刈りして二番穂を収穫する再生二期作の実証試験に乗り出した。米の需給に注目が集まる中、面積当たりの収量アップにつながる技術として着目。一番穂を8月、二番穂を11月に刈り取り、収量と品質、生産コストを見極める。

[▶「にじのきらめき」1作目→10アール600キロ 2作目→11月収穫 JA周桑](#)

(2025年10月31日付) 高知県土佐市の野村和仁さん(67)が23日、市内で栽培する、再生二期作の2作目の稲を刈り取った。同技術に挑戦して2年目の今年は、約3ヘクタールで取り組んだ。

[▶稲刈り取り 8、10月下旬に10アール収計1トン 土佐市 野村さん](#)

(2025年10月28日付) 水稻の収穫後に出てくるひこばえ(二番穂)を実らせてもう1度収穫する「再生二期作」の取り組みが広がってきた。米価上昇を受け、温暖な西日本だけでなく関東にも拡大。農家の収入を高める手段として期待され、JAが取り組む事例も出てきた。

[▶広がる再生二期作 関東でも 二番穂の生育良好、栽培法探るJAも](#)

(2025年10月28日付) 水稻の収穫後に出てくるひこばえ(二番穂)を実らせてもう一度収穫する再生二期作の取り組みが各地で広がってきた。二期作目に収量を確保するためには、積算温度の確保や適切な施肥や水の管理、一期作目の刈り高などがポイントになりそうだ。一方、栽培や販売の面でまだ課題もある。

[▶再生二期作 期待と課題 施肥や刈り高を試行錯誤](#)

(2025年10月28日付)

[関連農水省農薬対策室 農薬使用回数は通期で](#)

【長野・上伊那】飯島町の(有)水緑里七久保は、1回の田植えで2回収穫する「再生二期作」に取り組む。今年初めて挑戦し、JA上伊那管内でも初。8月下旬には、1作目の収穫をした。



切り株の長さを測る竹澤社長(長野県飯島町で)

[▶再生二期作 1作目収穫 労力・コスト減期待 長野県飯島町の水緑里七久保](#)

(2025年09月17日付・信越ブロック面) 【滋賀・グリーン近江】近江八幡市竹町の圃場(ほじょう)で23日、水稻の「再生二期作」の試験栽培による1作目の収穫作業があった。通常の収穫と同じ自脱型コ

ンバインで切り株を高めに残す「高刈り」を行った。政府が米の増産に意欲を示す中、再生二期作は新たな選択肢として成果が注目される。

▶[\[ニッポンの米\]水稲再生二期作滋賀で進む 米増産へ成果注目 近江八幡市竹町で試験栽培](#)

(2025年08月27日付・近畿北陸ブロック面) 茨城県では、JA北つくばと大手米卸・木徳神糧が連携し、24年産から実証がスタートした。実証に加わった農家は、「にじのきらめき」では10アール当たり収量で一期作目は690キロ、二期作目は22キロで計712キロ(ふるい目1・85ミリ)を確保した。



「にじのきらめき」などで再生二期作に取り組んだ農家の米(茨城県筑西市で)

島根県出雲市の農事組合法人ふくどみは24年産で、うるち早生品種1ヘクタールで取り組んだ。10アール収量は二期作目は192キロとなり、一、二期合計で762キロ(ふるい目1・9ミリ)。24年産は米価が上昇したこともあり、中米・くず米も含めた10アール当たりの収入は一、二期合計で30万円を超える。

▶[\[アグリフォーカス\]再生二期作 茨城・島根の事例](#)

(2025年01月15日付・営農面) 水戸市の照沼農園は、2年前から再生二期作に挑戦する。二期作目の米は生産コストが抑えられるため、自社の低価格ブランド「食卓応援米」として販売し、母子家庭

や病院などから重宝されている。

▶[\[私の経営\]水戸市・照沼農園\(水稻・施設野菜\)](#)

(2025年03月07日付・営農面)

多収のこつ、農研機構がまとめ

農研機構は水稻の再生二期作について、技術を正しく伝えることを目的に、栽培技術の特許を取得している。生産者が利用申請する…

▶[特許技術“教えます” 再生二期作で農研機構 利用申請呼びかけ](#)

(2026年1月15日付) 農研機構中日本農業研究センターは14日、静岡県浜松市で開いた現地検討会で、二番穂の収量を確保するポイントを報告した。早く植えて、高く刈ることが重要で、多収性品種「にじのきらめき」の試験では…

▶[再生二期作、早植え高刈りを 収量確保へ農研機構現地検討会](#)

(2025年10月15日付・総合1面)

農研機構が主食用品種「にじのきらめき」でまとめた、再生二期作の研究成果も産地関係者の注目を集めている。同機構の試験では、一期作目、二期作目の合計収量で10アール当たり950キロを確保。一期作目は地際から高い位置で刈り取ることで、稲の地上部に栄養を多く残して、二期作目も収量を確保するなど、多収のポイントを示した。

▶[ひこばえ実らせ再生二期作 温暖化逆手に農研機構開発](#)

(2023年10月05日付・総合1面)

米の収量 どこまで伸びる？

再生二期作は「農家や農地が減り、麦との二毛作に向かない中山間地の光になる」と期待する声も上がっている。

▶[\[知りたい聞きたい伝えたい\]#米の収量 どこまで伸びる？](#)

(2025年07月07日付・若者面)

期待の一方、注意点も まずは実態把握を

収穫後に伸びるひこばえ(二番穂)を実らせて収穫する、稲の「再生二期作」が拡大している。収入増

が見込めるとあって産地の関心は高まっている。水稻の生産量を高める方法として技術確立を進めるとともに、米需給の混乱を招かないよう、政府による実態把握が欠かせない。

▶[\[論説\]稲の再生二期作 技術確立と実態把握を](#)

(2025年12月04日付・総合2面) 再生二期作を巡っては、「農家の生産性を高めていくことが、米の長期的な安定確保につながる」(米卸)などと期待がある一方、長期的に見れば地力が落ち、農機の燃料代などコストが増える可能性を指摘する声も出ている。各地の事例を共有・分析し、安定栽培に向けた知見を積み重ねる必要がある。まずは実態把握から始めよう。

▶[\[論説\]稲の再生二期作 実態把握から始めよう](#)

(2025年01月23日付・総合2面)

■番外編

要注意！イネカメムシ被害の実態に迫る 再生二期作で注意が必要なのがイネカメムシ